

■随想

坂井周平(中43回)という人物 八十歳からの親交と最後の書簡

稲垣隆俊 (俳号鷹人・中43回)



農本主義をすすめた加藤完治翁之碑の前に立つ坂井周平氏

八十歳からの親交と「花の村」見学への誘い

から「俺の村を見に来てくれ」というお誘いの本旨は次のようなものであった。

戦争に敗れて陸士から戻り、開拓民として福島の山中に入ったことぐらしいし知らなかったが、八十歳の頃から在首都圏飯田中第43回同期会に顔を見せるようになって、そこで坂井周平君のストイックで壮絶な人生を知るに至った。彼



●いながき・たかとし
大正15年生れ。旧龍江村出身。協和銀行退職後、岡崎嘉平太先生に私淑して未踏科学技術協会に勤務。右脳俳句提唱者品川良夜に入門。平成13年右脳俳句フオーラム「ザクロの会」を結成。代表。俳人協会会員。

・「白河以北は一山百文」と蔑称されたこの地が現在どんなたたずまいをしているか直接見て頂きたい。

・この村を「花の村」にしようと同志を募り十数年間「西郷村花の会」の植栽運動の現況を見て頂く。

・文久年間(一五〇年前)に伊那人が福島県西郷村折口原地内に入植した歴史があり、伊那と当地との因縁の跡を見て頂く。

・二十九年間西郷村職員として、村行政に参画した。無力無能慙愧に堪えない(彼の言)が、現在当村は原発所在市町村を除けば、県下唯一の「地方交付税不交付団体」となっている。その基礎は私が課長として十六年間仕えた佐藤一村長の在任期間に築かれた。それが我田引水ではないことを見て頂く。



左から坂井さんご夫妻、後藤、稲垣、北原。同期生と自宅前で

陸士から敗戦。そして、開拓

国破れ、職業軍人であった彼は、暫く田舎に籠もる。進駐軍が軍政を敷けば明日をも知れない命、将来の目途はなかったが「開拓をして百姓になる」と決心する。「生きると決めた限りは食糧生産は間違っていない。人間を愚直に育てるのは農業である」というような考えを懐いて、昭和二十年八月末、下久堅の生家に帰る。中学三年・

こうした彼の要望にんて参加したのは同期三人（後藤正、北原惟行、稲垣隆俊）であった。今から五年前、時、恰も満開の桜に包まれて、あらゆるものに感銘を受けた旅であった。

四年と主任でお世話になった大熊先生を訪ね、そこで貴重な助言を頂く。内村鑑三の『興国の樞』、世阿弥の『生涯稽古』を読むよう勧められ、開拓への意欲に灯を灯された。農業関係の本を遮二無二、読んだ。これらが農業実践や後の社会教育に大いに役立った。若かった彼は加藤完治の農本主義に心酔し、開拓農民となり西郷村に骨を埋める決意を固めたもの入植一年半で過労に倒れてしまった。その後お世話してくれる人があり、村役場吏員として勤め始める。

開拓から村政に参加、教育に関わる

西郷村で彼の能力が発揮される。村長の片腕として行政改革や企業誘致に奔走する。東北新幹線着工、新白河駅建設、生活改善センター完成、新役場庁舎完成の時は総務課長であった。更に障害者福祉施設「太陽の国」などいくつもの学園施設を創設する。家庭を無視して東奔西走の毎日であったという。村政への貢献に対し退職時村長から「西郷村功労賞」を授与される。その後は村教育長を九年間、村長代理を勤めたこともあった。「行政の基本は公平無私である」との信念で、全身全霊を西郷村の発展に捧げた。実に見事な一生であったことを知り、敬意の念を益々深くする。社会教育の分野では社会教育委員を勤め、公民館

活動ほかあらゆる「村づくり」に貢献されたという。晩年は生涯教育、文化教育に注力、「西郷短歌会」や「西郷村仰歩句会」を作った村民の尊敬を集めた。彼自身も俳句を作っていた関係で、八十歳を過ぎた頃から私との文通による老後の親交が始まったわけである。

創刊十周年記念号（通巻百二十二号）

「ザク口誌」に贈られた最後の書簡

「祝ザク口十周年」

坂井周平

鷹人さんと私は、信州伊那谷、旧制飯田中学の同期生である。在学中特に親しかった訳ではないが、真面目な堅物を通してきた私が、彼の真摯な素朴な人柄に共鳴していたのであろう。卒業後三十数年を経て、世の中も自分の身辺もやや落ち着き、鷹人さんの消息もちらほら聞こえるようになり、なつかしさが胸に湧くようになった。すると同期生の会報が何かで、稲垣隆俊さん（俳号鷹人さん）が熱心に俳句を学んでおられて、母校の息遣いを生き生きと詠まれているのを読んだ。

段丘の上の母校や風薫る

鷹人

この「風薫る」と云う夏の季語が、懐かしさとともに薫りとなって胸に迫って来たのであった。私は村役

場に在職中、職分とは別に、俳句会・短歌会・花の会・川柳会等の生涯学習のクラブの創設のお手伝いをしてきた。俳句は昭和四十九年から学び初めて当時三十年も経過し（俳号三耕）、門前の小僧に等しい私も幾らか俳句鑑賞の力が付いたのであろう。平成十八年の初夏の飯田の同期生会（飯田中学は男子のみの三クラスで、毎年編成替えだからクラス会はないのが普通）で同席の稲垣兄を前にして、この句を賞揚した。その際詠み上げるのをとちってしまったが、透かさず補足してくれた仲間がいた。彼もこの句が強く印象に残っていたに違いない。

伊那谷の河岸段丘は地形学上典型的なもので、地理の時間に詳しく教えられたし、毎日見て暮らしている、心の底に焼き付いている。母校は天竜川の氾濫原の西の第一段丘のすぐ上であり、屋上から東方を見渡すと、天竜川の東岸の段丘が実に見事に積み重なって伊那山脈赤石山脈へと上って行くのである。通学途上の私を掴まえて、あの丘を造った理由と方法を本気で聴いて来た旅の人が何人かいた。自然の妙だとはにわかに信じられない造形美があるのである。「段丘の上の母校」と提示されただけで、今在る母校に息をしている私になる。そこへ「風薫る」である。昔のあの風がさわやかに吹き渡

るのを体感したのであった。作品としての評価になると、母校に体験のある人と無い人では、句から受ける感慨に違いが在ると思う。都会の人と田舎の人ではそれぞれの句に頂き切れないものがあるのと同じである。

稲垣兄は、まもなく『右脳俳句ザクロ』の最新号を毎月送って下さって、現在に至っている。今、手元に在る最も古い『ザクロ』は、平成十八年の〈ザクロ創立五周年記念号〉である。それから五年経って十周年を迎え、ここにワープロに向かっていく。感無量である。この五年の間に、私は『ザクロ』から有り難いこと、尊いことを沢山頂いた。其のいの一は「右脳俳句」という概念との出会いである。私は信州人特有の理屈っぽい癖があって、何でも知っている限り説明しようとする。其の癖が禍となって句が説明になり、生きた句を作れないでいる。そこに右脳俳句との出会いである。

最初に送られた、〈ザクロ創立五周年記念号〉の表紙に石榴の絵と共に波久先生のエッセイがあった。「面白いことは言わずお互い仲良く楽しもう」とあった。「文芸集団の最たるものは活気と精力である」とあった。その波久先生が今年の二月に逝去された。ザクロ同人の皆さんにはそれぞれの尊い感慨がお在りと思うが、

五年間の句集と鷹人さんとの交流を通してのみの私には、この波久先生のお言葉が先生の遺言のように思えるのである。

五年間に私が頂いたのは、右脳俳句とは、座禅の公案のようなもので、教科書的に理解して実行すればよいものではない、と云うことである。皆さんよく其の点を把握されてそれぞれの道に励んでおられる。敬服するのみである。頂いた初めの頃の句集に

文字摺の振れながらに天を衝く　前原はやと
という句があった。

痩せて雑草も碌に生えない荒地に根付いて、小さなピンクの粒々の可憐な花を螺旋状に着け、つんつんと天を突いている生気に思わず吸い寄せられていた。詠まれて見れば正にしかり。今の私はこの文字摺草である。みちのく白河の関の西、那須五峰の山根より、ザクロの精気の隆盛を祈り、敬意と感謝を込め、皆さんとの対面を期待し、このワープロを打ち切ることとします。

(稲垣記) 坂井周平さんとの文通はこの書簡を最後に
翌年平成二十四年八月逝去された。享年八十七。

謹んで哀悼申し上げます。　合掌